

未来への伝承

大昔のジオ資源と人々、土浦市域の黒曜石利用



去る9月9日、筑波山地域ジオパークが日本ジオパークに認定されました！上高津貝塚は本ジオパークの拠点施設に位置付けられており、本格的な活動に向けて準備を進めていきます。

さて今回は、旧石器時代や縄文時代の人々が利用したジオ（地質）資源のひとつ、黒曜石（こくようせき）を取り上げてご紹介します。

黒曜石とは、マグマが特殊な条件で冷えて固まった時にできた岩石です。ガラスとよく似た性質をもち、割ると非常に鋭い断面が得られることから、旧石器時代から刃物として使われてきました。現在でも、その切れ味の鋭さから外科手術のメスとして使用されることがあります。また、熱を加えると発泡し（パーライトという）、土壤改良剤や断熱材として使用されています。

マグマからできた黒曜石は、火山地帯でしか産出しません。中でも、石器として利用できるほどの質のよい

産出したものか特定することができます。近くで黒曜石が産出しない土浦市に暮らした人々は、遠くまで黒曜石を取りに行くか、物々交換で手に入れる必要がありました。こうした黒曜石の動きに注目することで、当時の人々の交流や移動の様子がわかります。

写真1は乙戸の谷（やつみち）道遺跡で出土した、いまから2万5千年ほど前（旧石器時代）の石器です。槍の先端などに加工されています。①、②は長野県諏訪星ヶ台産、③、④は和田峠産で、⑤は栃木県高草原山産です。旧石器時代の人々は、獲物を追って季節的に移動する生活を送っていました。黒曜石の入手も、移動ルートに組み込まれていたのかもしれませんが。写真2は縄文時代の石の矢じり（石鏃）です。⑥～⑪はおおつ野の前谷東遺跡で出土した、縄文時代中期のもので、すべて神津島産です。⑫、⑬は上高津貝塚で出土し



日本列島の主な黒曜石産地

産地は限られています（上図）。黒曜石は肉眼観察でもある程度の産地は分かりませんが、蛍光X線分析装置を使い、元素組成を調べることで、どこで

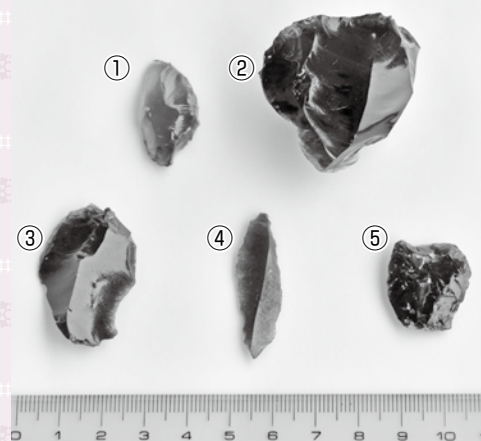


写真1
旧石器時代の黒曜石製石器

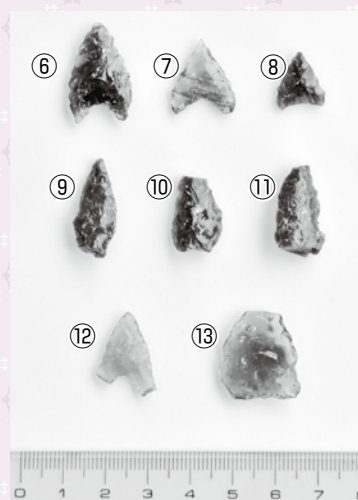


写真2
縄文時代の黒曜石製石鏃

た後晩期の石鏃で、和田峠産です。定住生活を送っていた縄文時代では、遠くまで石材を取りに行くというよりは、交換で手に入っていたのでしょう。土浦市域では、神津島産の黒曜石が、縄文時代中期にさかんに使われますが、後期以降には別の産地の黒曜石に変わります。土浦の縄文人たちは、時代とともに、「取引先」を変えたのかもしれませんが。

黒曜石をめぐる人々の交流については、考古資料館の常設展示室「交易」のコーナーにて展示中です。また、11月13日（日）の県民の日には、「ジオパーク認定記念！秋の上高津貝塚どきどき体験」を開催します。クリスタルアート（砂絵）で筑波山の地質を学べたり、実物の土器に触れるなど、様々な体験メニューをご用意しております。当日は入館無料ですので、是非お越し下さい。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎826・7111）